

「口は災いの元」 ヤコブの手紙 3 : 1 ~ 12

I 導入部

おはようございます。9月の第二日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に、会堂に集い、あるいは自宅でのライブ礼拝で、礼拝をささげることができますことを感謝致します。9月の中旬を迎えますが、夏に逆戻ったような暑さで、ミンミンゼミがまた元気に鳴っていました。少しは秋の気配を感じながらも、まだまだ暑さが身に沁みます。

本日は、「口は災いの元」という説教題です。人間だけに与えられた言葉を通して私たちは、自分の思いや考えを相手に伝えます。時には、その言葉で人を支え、励ましますが、時には、その言葉で人を苦しめたり、けなしたりします。人は言葉でも人を殺してしまいます。

現代は、SNS やメール、ラインの文字で、人をいじめたり、けなしたりして、その結果自殺すると言うような事件もあります。

テレビでも目立つ政治家たちが、言葉で失敗して、大臣をやめるというようなこともあるのです。私たちは、神様から与えられた言葉に関して、聖書が語る教えに耳を傾けたいと思うのです。今日は、ヤコブの手紙 3 章 1 節から 12 節を通して、「口は災いの元」という題でお話ししたいと思います。

II 本論部

一、語る者としてふさわしく生きる

言葉は神様から人間に与えられた素晴らしい伝達能力です。旧約聖書には、ロバが口をきいたという話もありますが、特別です。セキセイインコが言葉を話すというのも、人間の言葉を真似するだけで自分の気持ちを話すわけではないでしょう。ヤコブの手紙 3 章の前の見出しには、「舌を制御する」とあります。

1 節には、「わたしの兄弟たち、あなたがたのうち多くの人が教師になってはなりません。わたしたち教師がほかの人たちより厳しい裁きを受けることになると、あなたがたは知っています。」とあります。リビングバイブルには、「愛する皆さん。みなが教師のようになって、人の欠点をあげつらつてはいけません。自分も欠点だらけではありませんか。人よりもすぐれた判断力を持つべき私たち教師がもし悪を行うなら、ほかの人よりはるかにきびしいさばきを受けるのです。」とあります。

詳訳聖書には、「兄弟たちよ、(あなたがたの中で) 大勢の人が教師(自分かつてに他人を非難し、とがめだてする者) になってはいけません。あなたがたは、私たち(教師) が(他の人たちよりも) 高い標準で(よりきびしく) さばかれることを知っているはずです。(このように私たちは他の人々以上に責任をとり、また、よりきびしくさばかれるのです。)」とありました。ユダヤ教のラビ(教師) と言われる人々は、信徒から最大級の尊敬を受け、ラビに対する責任は、自分の両親に対する義務よりも優先するということが実際行われていたようです。このような事がキリスト教会の中でもあり、教師に対してユダヤ教のラビ

に相当する地位にある人々もあったようです。

ヤコブは手紙を書き送った人々が、教師の名声と地位と名誉を欲しがっていたので、ヤコブは教師であることの責任を忘れないようにと、1節のように語ったようです。

教師とは、人の上に立つ人であり、言葉を語り、言葉を通して教える人々です。語るという事が他の人々よりも多いという事です。リビングバイブルにあるように、教師と言う立場で、「人の欠点をあげつらってははいけません。自分も欠点だけではありませんか。」と、人を批判し、欠点を指摘する者にならないようにと指摘します。ユダヤ教のラビたちは、このように、人が律法に従わない事、守らない事、やるべきことをやらないことに対して、批判し責めてばかりいたのです。イエス様は語られました。「あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(ヨハネによる福音書 13:13~15) 教える者、指導する者の姿勢を弟子たちに語られたのでした。人の上に立つ者、権威が与えられている者、指導する者は、上からではなく、下から仕えるという事が、大切な事だと思うのです。

二、私たちは度々失敗するのです

2節には、「わたしたちは皆、度々過ちを犯すからです。言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です。」とあります。詳訳聖書は、前半を「私たちはみな多くの事柄においてしばしばつまずき(倒れ、過ちを犯し)ます。」とあります。私たちは、いろいろな事柄で失敗します。過ちを犯します。しかし、何といたっても言葉の失敗、言葉の過ちがいかにも多いことでしょう。しゃべり過ぎとか言いすぎとか表現します。

私たちも、仲の良い間柄で、言葉の言い過ぎや言葉での過ちで人間関係が悪くなるという事がよくあります。あまり話さないからという事も問題でしょうが、しゃべりすぎよりもはるかに問題はないでしょう。

旧約聖書に出て来る偉大な指導者モーセは、「わたしはもともと弁が立つ方ではありません。あなたが僕にお言葉をかけてくださった今でもやはりそうです。全くわたしは口が重く、舌の重い者なのです。」(出エジプト4:10)と言っています。リビングバイブルには、「主よ、私はとても口べたです。うまく話ができなためしがありません。こうしてお話ししても、思うように物が言えません。すぐにつかえてしまうのです。」とあります。口下手で、うまく話ができないモーセは兄アロンの助けを得てイスラエルの人々を導きました。そのモーセは、ツィンの荒野で、イスラエルの民が徒党を組んで水がないとモーセとアロンに逆らった時、モーセはイスラエルの民にこう言ったのです。「反逆する者らよ、聞け。この岩からあなたたちのために水を出さなければならないのか。」(民数記 20:10)とモーセは岩を二度打ち水を出したという記事があります。神様はモーセに、「岩に向かって、水を出せと命じなさい。」(民数記 20:8)と言われたのに、モーセは怒りの言葉と岩を二度打ったのです。このことによって、モーセは約束の地、カナンの地に入ることが許されなかったのです。

イスラエルの民の反逆はこの時だけではありませんでした。何度も何度もモーセやアロ

ンに食ってかかり文句を言ったので、モーセはイスラエルの民に対する怒りのゆえに、口をすべらせ、怒りを行動に移したのです。神様の言葉をその通りに語ればよいという事がいかに困難なのかを思わされます。聖書は、「モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。」(民数記 12:3)「謙遜を柔和と訳している訳もある」とモーセの素晴らしい人格を語っています。イエス様は、「わたしは柔和で謙遜だから・・・私に学びなさい。」(マタイ 11:29) と語られたように。モーセはイエス様のように謙遜で、柔和な人物だったのです。しかし、モーセも失敗したのです。怒りによる言葉の失敗は私たちが経験済みだと思うのです。怒っている時に、言葉を発すると失敗につながることを忘れないようにしたいと思うのです。

「言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です。」と聖書は語ります。しかし、地上の誰よりも謙遜だ、柔和だと聖書が語るモーセでも失敗したのですから、私たちは当然失敗するのです。私たちは言葉で失敗しやすい者であることを自覚し、神様に助けをいただきたいと思うのです。

三、失敗しても赦しがある

3節からは、人は舌を制御できないと語るのです。馬を御するには口にくつわをはめれば乗り手の思うままになるし、船は大きくても小さい舵で思いのままに操ると言います。しかし、馬にくつわ、船に舵で操れるけれども、人間の舌も小さな器官ではあるけれども、大言壮語すると言います。大言壮語とは、「口では大きなことを言っても実行が伴わないこと。おおぼらをふくこと。大げさな事を言う。威勢のいいこと。」とあり、口だけということでしょうか。リビングバイブルには、「同様に舌もちっぽけなものですが、使い方を誤ると、途方もなく大きな害を生じます。小さな火が大きな森林を焼き尽くします。舌は火と同じように、悪の炎で体全体を毒し、私たちの人生を滅びと災いの炎で焼き尽くすのです。」(3:5-6) とあります。

8節では、「しかし、舌を制御できる人は一人もいません。舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています。」とあります。リビングバイブルには、「しかし、自分の舌だけは思いどおりにできません。舌はいつでも、死の毒を吐き出そうと待っているのです。」

とあります。人間は、猛獣も扱い、意のままにしますが自分の舌はどうにもならないのです。

イエス様は、「蝮(まむし)の子らよ、あなたたちは悪い人間であるのに、どうして良いことが言えようか。人の口からは、心にあふれていることが出て来るのである。善い人は、良いものを入れた倉から良いものを取り出し、悪い人は、悪いものを入れた倉から悪いものを取り出して来る。言うておくが、人は自分の話したつまらない言葉についてもすべて、裁きの日には責任を問われる。あなたは、自分の言葉によって義とされ、また、自分の言葉によって罪ある者とされる。」(マタイ 12:34~37) と言われました。リビングバイブルでは、37節を「あなたがたのことばしだいで、あなたがたの将来は決まります。」と表現します。心にもないことを言いましたは、通用しないという事です。

私たちは、ヤコブの手紙が語るように、この舌で神様を賛美する言葉も、神様にかたど

って造られた人間を呪うのです。同じ口から賛美と呪いが出るというのです。

舌という言葉で私たちは、ペンテコステの時、イエス様の言葉を信じて祈り待ち望んだ120名の上に、「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」(使徒言行録2:3)とあるように、旧約の時代の言葉のバベルの混乱を聖霊が与えられた人々を通して、外国の言葉で福音を伝えたことを知っています。

私たちの言葉の問題、言葉の失敗、過ちを聖霊が助けて下さるという事を聖書が示していると思います。私たちは、日々の歩みの中で、聖霊に取り扱われる歩みをしたいと思うのです。語ることに於いて失敗するなら沈黙することです。ただ、黙る、語らないというのではなく、神様の前に沈黙し、静まるということ、つまり、神様の言葉を聞くということです。毎日、聖書の言葉に触れ続け、心にみ言葉をとどめ、み言葉に養われることを大切にしたいと思います。見える場所に、み言葉を張って、毎日見て声に出すことも有益でしょう。

また、モーセが怒りで失敗しましたが、私たちは、怒りから守られるように、感謝の人になりたいと思います。良いことも感謝しますが、悪く見えることも、その悪い事が神様によって最善に導かれることを信じて感謝したいと思うのです。み言葉を通しての神様との交わり、静まり、あるいは、礼拝を通して、神様に感謝する者となり、心に喜びと感謝に満ち溢れ、「人の口からは、心にあふれていることが出て来るのである。」とイエス様が語られたように、口から溢れる良きものを心に蓄えたいと思うのです。聖霊がそのように私たちに助け、導いて下さるのです。

Ⅲ 結論部

「わたしたちは皆、度々過ちを犯すからです。」という言葉は、私たちにとって大きな慰めです。ただの慰めではなく、私たちの過ちを、失敗を、罪を赦していただけるのです。

それは口先だけで赦されるというのではなく、神であるお方、罪のないイエス・キリスト様が私たちの罪の身代わりに十字架にかかり、私たちに代わって、父なる神様からさばかれ、私たちの罪を赦すために、私たちに代わり尊い血を流し、命をささげて下さいました。死んで葬られ、よみがえられることにより、私たちの全ての罪を赦し、魂を救い、死んでも生きる命、永遠の命、復活の望みを与えて下さったのです。

私たちは、行動においても言葉においても失敗します。過ちを犯します。「わたしたちは皆、度々過ちを犯すからです。言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です。」と言われても、言葉だけならば何の慰めもありません。しかし、毎日のように、罪を犯し続けるような者を受け入れ、抱きしめ、慰め、愛して下さるイエス様が私たちにとっては、慰めであり喜びなのです。毎日、聖書を通して、このイエス様に触れ、イエス様と交わり、イエス様のように、言葉を通して人を慰め、励まし、支える者になりたいと思うのです。この週もイエス様が共におられます。イエス様の言葉に私たちが養われて、励まされて、強められて、私たちも神様から与えられた言葉を通して、神様を賛美し、愛する者を励まし、支える言葉をこの週も語りたいと思うのです。